

沖縄大学 二〇一五年度 一般入試 (A日程)

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

数年前から、私は、サハリン^{注1}に行こうと思って、一つのアプローチを試みていた。ソ連の事情に
わしい人を介して、入国の査証^{ビザ}を手に入れようとしていたのである。

私が、サハリンに行こうとするのには、それなりの理由があった。何よりも、そこは私の生れ故郷
である。私は、樺太^{からふと}西海岸のタタル海に面した真岡町^{マオカ}で生れた。(1) この生れ故郷から私が「引揚
げ」たのは、一九四七年七月のことであった。私たち一家は、この地に多くの①縁戚^{マオカ}をのこし、②た
んどくで、ある日の朝、高台にある引揚者収容所にのぼった。私たち一家は、ほかの日本人引揚者同
様、後髪を引かれる思いで真岡港をあとにしたが、自分たちだけが「引揚げ」ていくことへの呵責^{かしやく}の
念がなかったとはいえない。祖父母や血縁・婚族と私たち一家は、その日以来、ずっと離れ離れで生
きていくことになった。こうした離別は、私の生い立ちに、影響をおよぼすものになった。

「引揚げ」たといっても、私たち一家は、日本人のように堂々と海を渡ってきたわけではなかった。
当時、日本人は「ソ連地区引揚に関する米ソ協定」(一九四六・十二・十九)にもとづいて本土に帰
っていった。この協定は、「日本人捕虜」と「一般日本人」を対象としていて、朝鮮人は引揚げの対象
から外されていた。

【A】 引揚げにかんする③すいは、旧「樺太」に住む朝鮮人にとって、けっ
して満足できるものではなかった。日本人は帰国していくのに、なぜ自分たちは祖国に戻ることで
きないのか。④疑問や⑤懐疑が朝鮮人のあいだに渦巻いていた。それは⑥そぼくながら、ま
もな感情であった。(2) その感情には激しい怒りが伏在していた。侵略戦争をやって無条件降伏した
日本人が、本国にダモイ(帰国)するのに、解放された朝鮮人はなぜ祖国にダモイできないのか。祖
国帰還は「樺太」にいる朝鮮人にとって、切実な自己要求にならざるを得ないものであった。それは、
この地にいる朝鮮人(日本敗戦時、約四万三千人)の⑦境遇から来ている。「樺太」の朝鮮人は日本に
よる植民地時代に「募集」や「徴用」によって、強制的もしくは半強制的に故郷から連れてこられた
人々がおおい。そういうケースとは別に、日本の「内地」で食いつめて、樺太まで出稼ぎにいった朝
鮮人もすくなくなかった。どちらがおおいかといえ、たぶん後者のほうであろう。が、どちらにせ
よ、先祖代々の故郷を仕方なしに離れてきたことに何ら変りはないのである。

私の父は、日本人の引揚げを横目で見ながら、自分たちも祖国に帰りたいといち早く考えるように
なった。その場合、朝鮮からの引揚船に乗って祖国にいくというのは、もともと望ましいものではあ
らう。しかしながら、それはきわめて空想的なものでしかなかった。解放直後の朝鮮は、「樺太」に
いる朝鮮人のこうした願望を実現するにはあまりにも遠いところにあった。朝鮮は、八月十五日の解
放後まもなく、米ソ両国によって南北に分断され、右翼と左翼はみずからの⑧ヘゲモニー^{ヘゲモニー}による統一政
府を⑨じゅりつすべく争っていた。日本最北端の「樺太」まで流れていった同族のことなど、おそら
く⑩がらんちゅうになかったのではないか。【B】 この人々のことを考える政治家がいたとしても、

具体的に何ら手を打たなかったのは歴史の事実どおりである。

こういう状況の下で、私の父が考えついたのは、日本人になりすまして引揚船に乗るということであつた。この計画は、苦肉の策である。法破りだ。しかし国家が民百姓をかえりみぬとき、人間は自力に頼るしか方法はないものだ。日本人のフリをして引揚船にのるのは、密航による方法よりは危険性がすくないものだった。一九四五年の夏以降には、いつやってくるかわからぬ引揚船を待ちきれず、ソ連領となつた「樺太」から脱出する日本人が相当数いた。なかには朝鮮人もごく少数いたが、せいぜい磯舟に乗つての密航であるから、これはすこぶるもつて困難な生命がけの行動だった。荒海をわたりきれずに海の藻屑になつてしまふ不幸な人々がいた。

その頃、父が、義母や長兄と家のなかでヒソヒソ話し合っている光景を、私は何回も見たものだ。ある日は、凍つて光る町の目抜き通りの雪道で、大きな樽酒を櫓そりに乗せてはこんでいる中学生の長兄と次兄の姿を見かけたこともあつた。兄たちは、四斗樽しとだるの酒を、あたかも爆弾でもあつかうような⑨しんちようさと警戒心を持つてはこんでいたが、しかし樽の内部でときおりはせるような水の音がするのにはまったく困惑し切つている様子だった。私はその樽酒が誰に届けられるのかは知らなかつたが、ソ連人が飲むことになるのは想像できた。

【C】父は私たち一家が「引揚げ」るために、要職のソ連人に、いろん注3なソデの下をつかつたわけである。いま私はそのことを思い起こすと、父のそうした現世的感觉になぜかしんみりしたものをおぼえる。とはいえ、父としてみれば、そのときははるかそるかの大バクチを打つていたわけなのだ。上手うまくいけば、出国のパスポートを入手できるが、失敗すれば、シベリア送りだと父は覚悟していた。(3)「チヨロマ」の言葉は、ロシア語の Тюрьма (牢獄) に当るが、この単語は「樺太」からの引揚者には一種独特な響きを持つている。人々は昔を思い出すときこのうる覚えの言葉を⑩侮辱するようにつかうが、しばしばそんなときには、自分がこのとんでもないものの厄介にならずにすんだのを祝福でもするように大袈裟おおげさで剽軽ひょうけんな身ぶりさえ思わず⑪ただよわせてしまふのである。

父が、法をおかしてまで日本人のパスポートを得たのは、望郷の一念がしからしめたものであつた。このまま「樺太」に残されるのはまっぴら御免だと、父が考えていたのはたしかである。父は、このままだと自分たち朝鮮人は永久に祖国に戻れないのではないかと怖れていた。不幸にも、その直感はこのちにちになつてみると、かなり当つている。いま、サハリンには四万人以上の朝鮮人がのこつている。この朝鮮人のほとんど全部が——解放された当時には——望郷の念にかられ、自分の祖国に帰国することをのぞんでいたのだつた。しかし、どういう経過があつたにせよ、解放当時の朝鮮人のほとんどは、今なおサハリンで暮しているのである。

こうして父は、私たち家族をつれて「樺太」から脱け出した。初夏のある朝早く、私たちは高浜町の仮り住いの家から、当時民政署の通訳をしていた長兄が調達してきたトラックに乗りこみ、人目をはばかるようにして夕陽ヶ丘にある引揚收容所にむかつた。この收容所で何日か暮し、そのあいだ注射を打たされたり荷物の検査を受けたりしたあと、私たち一家は他の日本人引揚者にまじつて真岡港にむかつた。

父の、望郷の一念がついに⑫酬いられるときがきたといえる。だが、いかなる事情があつたにせよ、彼が自分の家族だけを引きつれてひそかにこの島から去つていったことは、当地に残つた一族にも深い傷痕をきざみつけることになつた。

私は、いまでも「赤の広場」で見かけた祖父(母方)の姿を忘れない。その日は朝からあいにくの

雨が降り、重いリュックを背負い両手に手下げを持った引揚者の群は黒つぼく濡れそぼちなながら真岡埠頭ふところに近づいていた。本町一丁目の角を右に曲つて、正面前方に停泊している引揚船白竜丸を見ながらいよいよ最後の地点近くまで来たときであった。長兄だったか次兄だったか今ははっきりしないが、ふいに、

^{注4}「ハルべだ！」

と兄の一人が叫び声をあげた。

その叫び声には、なぜか恐怖に近いひびきさえ感じられた。

「赤の広場」は、私たちが進んでいく行列の左手にあった。南浜町一丁目の焼跡にその「赤の広場」はつくられていた。そこでは夜になるとソ連映画が上映されることもあった。演説壇——それはソ連人が折につけ集会につかっているものだが——三メートルほどの高さをもつこの四角い演壇の下に、祖父がひっそりと立ち尽していた。長身の祖父は洋傘を右手に持つて、こちらをまじろがずに見つめていた。祖父はごま塩頭けんづをしていて、顴骨けんこつのはった細面の顔立であった。その祖父は、いつも老眼鏡をかけていたが、そのときもそうであった。私たちと祖父との間は、およそ三メートルくらい離れていたであろうか。私たちは祖父が立っているいちばん近いところに差しかかっていた。だが私たちはおたがいに無言のままであった。そしてそのまま行列は前へ前へと進んでいったため、祖父との距離はそれにつれ少しずつ遠のいていき、やがて首をねじつて振り返らなければならないほどになった。おたがいに、やはり無言であった。やがて祖父は洋服のポケットから真白いハンカチを取り出すと、老眼鏡をずらし、目頭めづを拭ぬぐった。そのとき、父が声を絞つて、

「見るな」

と短く命令した。そのするどい断腸の一言を私はいまでも覚えている。

少年の私は反射的に目を伏せた。そして濡れた地面を見つめて前へ前へと歩いたが、自分たち一家がぐる、なって祖父から逃げ出しているような悲しい気持にとらわれた。なにか⑬鉛鉛でも無理に呑みこんだような息ぐるしさが体をめぐっていった。もつともこの罪深くて息ぐるしい感じは、少年の気儘きままさで引揚船のタラップをのぼったときには、あっけないほどに忘れさられてしまっていたが。

引揚船が、防波堤から出ていくとき、私は満足感さえ覚えていた。埋立地あいはまぢょうの相浜町というところで育った私は、しぜん浜辺や岸壁の近くで遊ぶことがおこった。岸壁からは、胴体に白く大きな十字を染めぬいた引揚船があざやかに近づいてくるのが見えるときがあった。その引揚船が何日か経つとこんどは引揚船をいっばいのせて突堤とつていにある白い灯台横から船首をあらわし、一路沖合にむかっている。私は憧憬のまなざしでいつまでもその船影を眺めていたものだ。じぶんもいつかあの引揚船ののつてみたいものだと思いつながら……。

【D】サハリンに残された一族のことなど、甲板の私はもうほとんど考えていなかったといえる。祖父のみならず、祖母や義姉、伯母一家や亡母の従妹一家と私たちは別れてきたのであった。少し詰め船底に入ると、悲しみはもうすっかり消えていた。少年ながらも、これから先のことが不安になりはじめ、すべてが夢みたいに思われた。もつとも、私が無邪気すぎたとしても、十二歳の少年にとつて、それはむしろ自然だったかも知れない。私は肉親との別離の意味を、当時まったくわからないうちから生きていたわけではないが、それがどんな意味をもっているのかを深く知っていたとは⑭到底いえないのである。生きた人間同士の別離を体験したのはそのときが最初であった。

（李恢成『サハリンへの旅』講談社、一九八三年。講談社文芸文庫版、一九八九年を用いた。）

問四 本文中に(2)その感情には激しい怒りが伏在していた。とあるが、それはなぜか。六〇字程度で説明しなさい。

問五 (3)「チヨロマ」この言葉は、ロシア語の「орбма(牢獄)に当るが、この単語は「樺太」からの引揚者には一種独特な響きをもっている。とあるが、それはどういうことか、一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 この文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で自由に書きなさい。